



異世界で怠惰な 田舎ライフ。2

ALPHAPOLIS

太陽クレハ
Jaiyo kureha

アルファライト文庫 

登場人物紹介

characters

ニール・ロンアームス

ロンアームス伯爵家四男。
【剣聖】のスキルを持つ。
真面目な優等生だが、
シスコン。

ラーナ・ロンアームス

ニールの妹。趣味はリバーシ。
負けず嫌い。

テレシア・フレンチア

「聖女の再来」と
あだ名される絶世の美女。
嫌なことがあると妄想に
逃げる癖がある。

ローラ

ユリの母親代わりの
メイドさん。
何よりもユリが
大切で弟のようにも
思っている。

リム

ガートリン家のメイド。
「アズライトの瞳」を持ち、
魔力の流れを
視ることができる。

ディラン

ユリの父、
ガートリン男爵の
警護を担当する
元冒険者。
ユリを鍛える。

ユリ・ガートリン

【超絶】のスキルを持って、
異世界に転生した本作の主人公。
全てにおいてやる気がない。

第二話 のんびりまったり四年間。

俺、岡崎椿がクリムゾン王国ガートリン領……まあ、田舎なんだけど、その領主ガートリン男爵家三男のユーリ・ガートリンとなつてからすでに八年目に突入していた。

貴族の三男とはいえ俺は庶子だから、正妻さんや二人の兄にはめっちゃくちゃ嫌われている。

その代わり、屋敷にいる人達——メイドのローラや指南役のディランには随分と可愛がつてもらい、わりと楽しくダラダラと過ごせている。

そんな俺が転生した理由は、二十六年後に崩壊する世界を救えと神様に言われたからだ。その際に【超絶】という何もしなくてもレベルが上がっていくチートスキルをもらったんだけど……今のところ、崩壊についてなんの手がかりもないし、何より面倒だからのんびりやっていこうと思っっている。

「んー、ローラ……外が騒がしい。いつもみたいにみんなの口にパンでも突っ込んできてよ」

ローラが今日も、俺のことを起こしにきてくれた。

「私は、そのようなことはしておりませんので」

「ふあ……せっかく朝の修練がお休みだというのに……」
 ガートリン家は代々武門の誉れ高い家らしく、俺は四歳の頃から朝の稽古を義務づけられていた。

しかし今日は、元冒険者で今はお父様の護衛と俺の指南役をしているデイランがいない。というのも、クリムゾン王国の男爵以上が集まる会議にお父様と正妻さんが招集されたため、護衛としても出かけてしまったのである。

なんの会議かローラに聞いてみたところ、国家間の平和協定が結ばれるらしく、その取り決めの確認や課題の調査をするためのものとのこと。

こちらの世界には、元々一つの巨大な国家があったんだけど、三百年ほど前に分裂してしまい、戦国時代を経て、現在の四つの大国——ルーカス、ポワゼル、シャンゼリゼ、そして俺の住んでいるクリムゾンにまとまったのである。

それぞれの国ごとに独自の文化や民族が存在していて、例えばクリムゾン王国は魔法や農業が他の国に比べて発展している。

ただ、その四つの国も数十年くらい前まで、それぞれの国が覇権を勝ち取るために、毎年のごとく大規模な戦争をしていたそうだ。
 戦争の当事者でない俺が何か言うのはナンセンスだろうが面倒くさいな。

それでも長引く戦火は四つの大国を同じように疲弊させ、十年くらい前からは冷戦状態だったんだと。

そして、ここ最近はやや物の交流が盛んになってきたことで、偉い人達の間でもいい加減しつかりとした協定を結ぶべきだって声が強くなり、色々調整していたようだ。

つまり、お父様達が参加しているのはその努力が実に実を結ぶ、すごく重要な会議だってことだね。

それで、会議が無事に終了して四カ国平和協定を結んだことが書かれた手紙が昨日、屋敷に届いた。

さらにこの報せは、同日中にガートリン領一帯にも報じられて……領内最大の街クルシノは、お祭り騒ぎになっているみたい。

「ユUri様。いつまでもタラタラしてはいけませんよ」

「ふあ……起きるかな。そーいや、昨日聞いたけど、今、街の方ではお祭りみたいになっ
 てるんだって？」

「ええ、クルシノは昨日から、にぎやかなようですね」

「なんかあの街はいつも祭りが開かれている気がするよ」

「ふふ、クルシノはガートリン領最大の街ですからね。それに、騒ぎたい人もいるのでしよう。どこかの国といつ戦争になるか分からない状況から解放されたんですから。これで安心して暮らせると分かれば、騒ぎたくもなると思えますよ」

「そんなもんかね」

「そんなもんです。それと『屋敷の使用人にお休みを与えるように』と、お館様やかたさまからの手紙がありましたので、屋敷と別館には私を含めて数人しか残っておりません。ご不便をおかけするかと思いますが……」

「いいんじゃない？ まあ……盗賊に攻め込まれたりしたら、大変だけどね」

俺がそう言うと、ローラはカーテンを開けて、窓の外を指差す。

「そこはガートリン家が誇る衛兵であるカットさんとピートさんに頑張がんばってもらわないといけませんね」

「んー、あいつらで大丈夫かな？ 少し心配かもしれない」

「ふふ。あ、そういえば、クルシノの街に吟遊詩人ぎんゆうしじんが訪れていると聞きましたよ？ お暇ひまなら、見に行くのもいいかもしれないですね」

「へえ、それは楽しみだなあ。あ、一緒に行かない？」

俺のこんな返事を想定していなかったのか、ローラは驚おどろきながら応じた。

「へ？ あ、え？ 私もですか？」

そういえば、ローラと二人でクルシノまで出かけるのは、初めてかもしれない。

「うん、ローラにはいつもお世話になってるからね。色々と奢おごっちゃる。それに、休日なのに屋敷で働いてくれる奴やつらにも、いいもん食わせてやりたいからお土産みやげでも買ってこよう」

「は、はあ。私は構こまいませんが……」

「そいじゃ、よつと、着替かえるかな」

少し呆気あつげに取られた様子のローラを気にしつつ、俺はベッドから起き上がる。

「はい、着替かえはこちらに……。では、私は……」

「うん、ローラは街娘まちむすめみたいな服に着替かえてきてね。こういう祭りはお忍しのびで行った方が面白おもしろいから」

こうして俺は、ローラと二人でクルシノの街に出かけることになった。

「今日は、本当にいい天気だな」

屋敷の前でローラの支度しとくが終わるのを待っていると、門の端はしに隠れるような感じでポロ

ボロの洋服を纏った男がいることに気づく。

あの位置からだど、カットとピートには見えていないっぽいな。

明らかに怪しいが……二人とも休日出勤してくれている訳だし、ここは俺が出向いてやろう。

「おっさん、何か用か？」

扉を開けて顔を出すと、男はニヤリと笑って俺に封筒を渡した。

「おー坊主、これを男爵に渡してくれねーか？ ヒイヒイ」

「ん？ これは？ 差出人の名前が書かれていないけど？」

「ああ……名前は中に書いてある。絶対にガートリン男爵に渡せよ。いいな」

「分かった」

「頼んだけ。ヒイヒイ」

それだけ言い残して男は立ち去った。変な笑い方だなあ。

というか今、お父様は王都にいらっしゃるんだけど、どうしよう。

まあ……俺の【危険予知】スキルも反応しなかったし、執務室に置いておけばいいかと封筒を懐にしまったところで、ローラが来た。

「ユーリ様。お待たせしました」

青いワンピースに、髪を赤いリボンで結んでサイドテールにしている。

普段の見慣れたメイド服とは違って新鮮な感じがして、いいな。

はあ、あと十年早く生まれていたらと少しだけ悔しく思ってしまう。

すると俺が唸っていたのを不審に思ったのか、ローラが心配そうに声をかけてきた。

「あの？ どうされました？」

「いや、なんでもないよ。ローラの私服が可愛いなって、驚いただけ」

そう告げると、ローラはボツと顔を赤く染めてモジモジと俯く。

「か、可愛……も、もう……ユーリ様は……」

「あ、クルシノでは俺に『様』をつけるのは禁止ね？ さ、行こうか？」

俺はローラの手を掴んで、クルシノに向かうのだった。



ここはガートリン領のある山にある廃屋。

男達が酒を飲みつつ、賭け事や馬鹿話に興じていた。

その中でも体も態度も一際デカイ男が、ユーリに手紙を渡した男に話を振る。

「ちゃんと、渡してきたんだろうな。ゲイフ」

「ヒイヒイ、確かに持って行きやしたぜ。シンゲの頭」

「なにいひ」

シンゲは大きな杯盃を持って、「コクコクと豪快ひょうがいに飲んでいく。

「しかし、頭。わざわざ、相手側がわに知らせなくてもいいんでは？」

「バックヤロウ。それが俺様の流儀しゅうぎつてもんよ。ガハハハ。この『火山のシンゲ』が攻め込むつったら、貴族様は尻尾しっぽを巻いて逃げちまうから楽でいいんだぜ」

クリムゾン王国では、金貨以上の賞金首に対して通り名がつけられる。

この山賊団の頭領ちゆうりやうであるシンゲは二メートルを超える身長で、愛用の魔導具『ファイアーアックス』を軽々と使いこなす。その姿から、『火山』の二つ名がついた。

さらにこの男、単なる力自慢ではなく自身の盗賊団を手足のごとく自在じざいに操る有能ゆうのうな司令官であり、クリムゾン王国中を荒らし回っていた。

「ヒイヒイ、なるほど、逃げる奴らを襲う訳ですかい」

「おうよ。野郎ども。攻め込むのは今日の日暮れの間だ！ 平和協定なんぞで浮うかれてる奴らを地獄じごくに叩き落してやるんだ!! 準備しておけよ!」

「「おうー」」

◆
シンゲは、仲間達の野太い声を聞いて満足そうにまた酒を呷あおるのだった。

屋敷を出て十数分、特に何事もなくクルシノに到着。

今は街の広場で、吟遊詩人の語りを聞いている。

二人組のようで、女性が歌う傍らで男性がギターみたいな楽器を演奏していた。

女性が歌い上げる内容は三人の英雄がドラゴンを倒すというもの。

女性の表現力に思わず息を呑む。

演奏が終わりを迎え、拍手が鳴り響いた。

街の広場が熱気に包まれる中、俺は隣となりにいるローラに少し興奮こうふん気味で話しかける。

「ローラ、すごかったな」

「そうですね。ユーリさ……ユーリ」

「なんだ？ まだ慣れないの？ あと敬語けいごも禁止だから」

「は……う、うん。分かった。ユーリさ……ん」

「ふふ、とんだけ不器用ふきようなんだよ」

俺が投げた銀貨を吟遊詩人が取ったのを確認してから、ローラを連れてその場を後にした。

街中をローラとぶらついていると、色々なお店が目に入ってくる。

「なんか珍しいものないかなあ」

「お、恐らく、ガスト商会のお店なら、様々な物を取り扱っていると思っ……思うよ」

「あー、あそこでしょ？ クルシノの商会で一番でっかい店だ」

俺が指差す方には、辺りの店と比べ一段と大きな構えの店があり、沢山の客でにぎわっていた。

ローラの手を引き、人々の間をすり抜けてガスト商会の店へと行くと、細身の店員が大きな肉の塊をドンと店先に並べていた。

「でっかい肉の塊だな」

「ふふふ、坊ちゃん。お目が高いですね。この肉は今日入荷したばかりのドンクビークっていう豚の魔物の肉なんです。焼くと香ばしい香りが肉汁とともに溢れてくるんです。ワインと煮込めば、とろけるような柔らかさになるんですよ」

「マジか。美味しそうだ。いくらだ？」

屋敷には何人くらいの使用人が残っているだろうか？ まあ、余ったら余ったでいいか。



できるだけ多く買っておこう。

「えーと、はい。このサイズだと。銀貨七枚……いや、今日は祭りです。銀貨六枚にまけましょう」

細身の店員がローラの方を見て、そう告げる。まあ、ローラが金を払うと思うもんな。

「ハハ、いいね。じゃ買おうかな」

そう言うと、店員はギョツとして俺に向き直り頭を下げた。

「おっと、私としたことが失礼しました」

俺は懐から硬貨を取り出して細身の男性に手渡す。

その様子を見ていたローラが驚きの声をあげた。

「ええ!? ユーリさ……ん。そんなお金、どこから?」

前に賭場とまで得た金だけど……なんて言えない。

そもそも、賭場で俺がめちゃくちゃ稼かせいだことをローラは知らないし、伝えていない。

なぜなら、怒られそうだからだ。

「ハハ、多少は貯金していたからね。まだお祭りを見て回りたいし、お金を払っておくから、肉はこのお店で保管しておいてくれる?」

「はい。私、ガスト商会のロトアが責任を持って保管しておきますので」

◆

それから俺達はクルシノを一通り観光した後にはロトアからお土産のお肉を受け取って屋敷に戻ると、ドンクピークの肉を肴さかなに、どうせうちに盗られるものなんてないだろうとカットやピートにも声をかけて、宴会えんかいを開くことにしたのだった。

ユーリ達が宴うたげを楽しんでいた時、シンゲの盗賊団はガートリン家の屋敷を包囲していた。しかし、一向に動き出す様子を見せない。

「どつうじうことだ。衛兵すらいない。どうやら屋敷の中で宴会しているようですね。こいつは……どつう考えてもおかしいでせ。ひみっとして……狙ねらわれているのが分かっていないってことですかね? そうじゃなけりゃ罠わなかもしれねえですぜ」

ゲイラが、ガートリン家の状況をシンゲに伝える。

シンゲは手に持っている酒を飲むところ、ニヤリと笑い出す。

「この『火山のシンゲ』を相手に……無策むさくなんてことはないだろう。俺達を前にして、逃げんといふことは……実は膨大な兵士を潜ひそませているとみたり! ……そんな罠にまんまとはまるシンゲではない。野郎ども、撤退てたいじゃ!!」

シンゲと仲間達は馬に跨り、その場を後にする。

ユーリは一人屋敷の窓際に佇んで、シンゲ達が去っていくのを眺めていた。
 「【危険予知】のスキルが反応したから……確認しに来てみたが、意味が分からん。あの連中はなんだったんだらうか？」



俺がこの世界に転生してから九年が経った。

転生前が十七歳だった訳だから、あと九年経てば、こちらの世界の方が長くなるって考えると少し不思議な気分になる。

……幼馴染の子——冬咲桜はどうなったんだらうか。

トラック事故と一緒に巻き込まれた訳だし、もしかしたら俺と同じくこちらの世界に転生して……再会できたり？　なんて思っていたんだけどね。

まあ、クリムゾン王国だけでもかなり広いのに、同じくらいの規模の国があと三つもある。

仮に転生していたとしても、普通の移動手段は馬車くらいしかないこの世界で、ただ一人を見つけるなんてのは、まさに奇跡みたいなもんだからなあ……。

ふむ、なんで俺はこんな昔のことをしみじみ思い出しているんだらうか。最近ずっと続く嵐のせいで、気分がモヤモヤしているからかもしれない。

ふあ……明日には晴ればいいんだけど。

「んー晴れたなあ」

ベッドの中から見える外の景色は、快晴の一言。

数週間にわたってガートリン領の天気は大荒れだったが、今日は一面の青空。本当に久しぶりだ。

風が結構強く、窓から勢いよく部屋に吹き込んでくる。

「ローラ、風が強いから窓を閉めて。ついでにカーテンも閉めてくれ。今から二度寝するから」

俺がそう言うと、部屋で掃除や俺の着替えの準備を始めていたローラが口を開く。

「ユーリ様、早くベッドから出てきてください。シーツを干したいんです」

「……起きたくない」

「ようやく、晴れたんです。今日こそ、ユーリ様のお部屋を掃除しませんと……」
 「ええ……今日は修練が終わったら、部屋にこもって芋虫のモノマネでもしようかと思っ
 ていたのに」

「なんですか、それは……」

ローラが呆れたようにそう言うと、その横でローラを手伝っていたメイドのイーナが口
 を開く。

「ユーリ様！ 私、お魚が食べたいです」

「ん？ いや……あの」

「ユーリ様、私も久しぶりにお魚を食べたいです」

「あ、釣り道具はちゃんと準備しているんです」

ローラに続いてイーナがそう言いながら、入口の方にある釣り竿を指差す。

「君達ねえ。昨日まで凄まじい嵐だったでしょう？ だから、川は土砂で濁って増水して
 いるだろうね。いくら魚釣りが上手いからって魚は釣れないと思うよ？」

「……お魚」

「お魚です」

俺の言葉を受けて、あからさまにガツカリとしているローラとイーナ。

そんな顔をされても、釣りに行く気はない。面倒だし。

さて、ローラ達のプレッシャーも凄(まじ)いし……仕方ないから起きてこの場を去ろう。

日課の修練を終えて部屋に戻ると、ローラ達が部屋の大掃除を始めていた。

さすがに、そんな部屋でダラダラするのは大変居心地が悪いので、俺は散歩に行くこ
 とに。

目の前には、ガートリン領を襲った嵐の爪あとが残されていた。

本来、夏の終わりのこの時期は風になびく鮮やかな緑の穂波を楽しめるのだが……。

ここ数週間続いていた暴風雨や竜巻のせい、ガートリン領の主力作物である麦の畑は
 大いに荒れている。

そのため、秋の収穫は絶望的だと使用人達が言っていた。

となると、当然ガートリン領の税収も期待できず、節制が必要になってくる。

だからだろう、今日の朝食は味の薄い野菜のスープに薄っぺらいベーコン二枚、そして
 カチカチのパンと、かなり質素な感じだった。春頃までは、ふわふわのオムレッツや山盛り
 のサラダがあったんだけどなあ。ラーリ料理長も、かなり苦労しているんだろーな。

まあ、食事に対するこだわりみたいなのはないけれど、さすがにこう品数が少ないと

ちよつと辛い。

ちなみに、正妻さんは実家に一時帰省しているそうだ。貧乏生活に耐えられないんだらう。

明日は釣りに出かけて、俺の住む別館に魚を持っていくのもいいか。みんなも食べたいだらうし。

さて、今日は何をやるかな。

前々から考えていた俺専用の小屋を建てる計画を進めるか。時間はあるし。

ローラに追い出され続けて幾星霜、今日みたいに部屋に引きこもれない時用の小屋を建てることは、俺の悲願だった。

とはいえ、屋敷からすぐのところで作ったら即バレて色々と噂になるだらうし、どうしよう。

ウルドラの森あたりなら、大丈夫かな。あそこはそんなに人が来ないと思うし。

よし、今日はウルドラの森をふらふらと探索して、素材探しや場所決めでもしようか。

ウルドラの森は以前、エルフの石碑を発見したところで、奥深くに行くと俺の魔法の師匠であるエルフのコラソンが住んでいる。

師匠の家には魔法で転移して、しよつちゆう行っているけど、森に入るのは久しぶりだ。

そんなことを考えながら歩きつつ十分——気づいたらウルドラの森の前に立っていた。

いまだ荒々しく吹き荒れる風によって森全体がひしめきざわめいていて、ちよつと不気味な感じがする。

最悪、何か起きたら転移して逃げればいいかと、森の入口に時空間魔法【ロングワープ】の目印となる魔法陣を描いて、奥へと進むことにした。

「とと……ちよつと滑った」

嵐の後だと木の枝が落ちていたり、地面がぬかるんできたりして歩きにくい。

雨上がりの森に入ることなんてこれまでなかったけど、こりゃあ今の靴だとキツイかも。こういう時のための靴を作るなり買うなりして、準備しておかないとな……。

「ん？ ここいらの木々は、ずいぶん変な倒れ方をしているな」

ウルドラの森に入って一時間くらい歩いたところで、一帯の木々が奇妙な倒れ方をしていた。

んー、これも嵐の影響なんだろうか？

たとえるならば、でっかい魔物が通ったみたいな感じである。

まあ、折れちゃった木は小屋作りに使えるだらうし、【ポケット】に入れておくか。

時空間魔法【ポケット】は、師匠に教わった魔法。端的に言えば、魔法で作り出す袋のようなもので、魔力次第でかなりの容量まで広げられる。

まあ便利な魔法なんだけど、残念なことに魔力の消費が凄まじい。

しかも、今は『足枷の指輪』のせいで俺の魔力はかなり減っているから、この魔法はあまり使えないのだ。ちなみに、この指輪をつけている理由は師匠に命じられたから。俺の魔力量に体の成長が追いついていないから、魔力を抑えろってことらしい。

さて、木を回収しながらテクテクと歩いていくと、エルフの石碑を発見した湖までたどり着いた。

そういや、前にこの辺りで上級薬草を摘んだような気がする。

この辺りは空気も澄んでいて、落ち着くなあ。うむ、ここに小屋を建てるのがいいかもしれない。

「ふあーちよっと眠気が……よし」

とりあえず、建設予定地だけは決まった。あとはガラガラしよう。

そう決意した俺は寝っ転がれるくらいに長椅子と、大きめの日傘を作ることにした。しゃがみ込んで地面に手をつき、【アルケミ】のイメージを練り上げる。

これも師匠から教わった魔法で、対象物の形を大雑把に成形する無属性の魔法だ。

もちろん、めちゃくちゃ大きなものや硬いものをいじくり回すのは無理だし、手の込んだ細工を施すっていうのも難しい。というかできない。

ただ、そんなに魔力を使わないし融通が利くので重宝している。

例えば鍵をなくした時は、適当な針金を【アルケミ】で調整してガチャガチャしてたら、なんとかなった。

イメージが固まったので、魔力を地面に流して【アルケミ】と唱える。すると大地がうねりはじめ——ドロドロになった土が徐々に長椅子と日除けの形になっていく。

これを【エアーカーター】で形を整え……無事、完成!!

その椅子に寝っ転がると、心地よい風が頬をゆっくりと撫でる。

耳をすませば、湖の水音、木の葉の擦れ合う音、そして動物達の鳴き声。

「最高だな……ふあああ……おやすみなさい」

ドンドンという地響きのような音で目覚めた。
腹の空き具合からして、今は丁度昼頃だと思っ

「いやはや、二時間くらいしか寝ていない。

「んー？ うるさいなあ」

音のした方に目を向けると、巨大な猪がブォーン!! と鳴き声をあげつつ、木々を押し退けて湖に出ようとしていた。

あの猪は……えっと、魔物凶鑑で見たような？

確か、ホワイトボアとかいう魔物だったはず。

なんで魔物がこの森に？ 俺は夢でも見ているのだろうか？

ウルドラの森は魔物が出ないはずだし、まあ夢だろう……と二度寝しようとしたら、ホワイトボアが再びブォーンと一鳴きする。

寝ぼけている場合じゃないと顔を叩き、無理やり覚醒してから飛び起きる。

目を凝らしてみると……なんでか知らんが、めちゃくちゃ大暴れしているぞ!?

「あ、まずいな、こつち来てるかも」

ホワイトボアは大木をなぎ倒しつつ、間違ひなく俺のいる方に突進してきている。

「おおい。ここは俺の新しい昼寝スポットになったんだ。荒らさんでくれよ」

ホワイトボアに向かって手を突き出し、【アイスブレット】と唱えると、俺の目の前に三つの氷塊が浮かび上がった。

ふう、と間を置いてから、氷塊を高速で打ち出す。

次の瞬間、ホワイトボアの頭部と左肩、右足の太ももに氷塊が突き刺さって、森の中へと吹き飛んでいった。

「アレ……？ 意外と弱いな?」

久しぶりの魔物との戦闘だったから、ちよつと緊張したがなんととも呆気ない。

これ、死んだフリとかじゃないよな……? と警戒しながら近づいてみたが、大丈夫だったので、ホワイトボアの血抜きを始める。

随分と驚かされたが……まあ、屋敷の皆で食べられるくらいの肉を確保できたのはありがたい。

ただ、こうも大きいと保管するのが大変なんだよな。

この世界では科学技術が発達していなく、氷魔法が失われているからか、頼りの魔法で食材を凍らせて保管するつてことが基本的にできないんだよね。

師匠によれば、北の方にあるルーカスつて国は氷穴を使つて保存しているらしいが……。 「うちの近所に氷穴があるなんて聞かない。俺は氷魔法が使えるんだし、今後を考えて昼

寝用の小屋よりも食材保管庫を作っておくか」

ユルドラの森でのんびりと過ごすつもりだったが、目も冴えてしまったし、善は急げだ。今日は、食材保管庫を作ろう。

となると……このホワイトボアはどうしようかな。

とりあえず切り分けて氷漬けにして、【ボケット】にしまっておくか。

【ロングワープ】を使って、ユルドラの森の入口まで戻る。

「やっぱ、【ロングワープ】は魔力の消費が激しいな」

そう独り言ちてから、息を整え周囲に注意を向ける。

特に人の気配は……ないな。

さてさて、食材保管庫はどこに作ろうかな？ まあ、地下がいいか。夏には、涼みに行くし。

それと見つかりにくくて、俺の釣り場が近いところだと便利かもな。

とはいえ、水場が近いと地盤が緩いかもしれないから、なかなか悩ましい。

……よし、俺がいつも日向ぼっこを楽しんでいる丘がいいかな。

あそこなら、屋敷と釣り場にも近いから丁度いいしね。

そんな訳で、森からまた二十分ほど歩いて、丘に到着。

さて、作業を始める前に……とりあえず人が来ないようにしないとな。

懐から紫色のガラス玉がついた棒を取り出して、四方に設置する。

これはエルフの石碑と同様、人払いの魔法を発現する魔導具。名前は『セレートの杭』っていうらしい。魔法訓練の一環で、魔導具くらいは使えないとダメだつてことで師匠から渡されていた。

まあ、作るものは俺の小屋から食材保管庫に変更になったけど。

早速、魔力を供給すると淡く紫色に光りだし、正常に起動したのか、辺りの景色が一瞬揺らぐ。

これで……『セレートの杭』が壊れたりしない限り、ここは認識しづらい場所になる……はず。

「よし。あとは地面を整地していただくだけだな」

そう呟き、俺は地面に手をつけて【アルケミ】と唱える。

すると少し柔らかかった地面が硬質な岩へと変わっていった。

あ、しまったなあ。ある程度、掘ってからのの方がよかったかもしれん。

まあ……どっちでもいいか。

数時間後。

……疲れた。欲張って広く作りすぎたかな。
この感じだと、テニスコート一面分くらいはあるかもしれない。
とりあえず地下空間を作ってみたが、なんだか物足りないの、先ほど【ポケット】に収納しておいた木材を【エアーカッター】で加工して、棚のようなものを置いてみたが……ガランとしていて寂しい感じがする。

ふむ……でっかい氷塊でも作って置いておくか。

しっかり魔力を込めておけば、余程のことがない限り溶けないだろうしね。

というか、寒いな……地下深くまで掘りすぎたかもしれない。

さらに氷魔法を使って、この空間をキンキンに冷やせば……もはや冷凍庫だな。

「へプシ……風邪ひく前に帰ろう」

来週にはアラスを沢山釣って、ここに入れておこう。



時は移り、俺は十歳になった。思っていたよりも背が伸びない。

今は冬が終わり、春の芽吹き季節だ。

俺は部屋でまったりローラの淹れてくれた紅茶を飲んでいる。

「ふう……はあ……眠いね」

「ユーリ様、今寝ちゃうと、夜に眠れなくなってしまうよ」

ローラは二杯目の紅茶を蒸らしながら、少し呆れた様子で言ってくる。

「はい、ユーリ様。今度は少し濃いめの紅茶です。目を覚ましてくださいね」

「ふはあ……そうだね。いただくよ。ふう……いい香り」

俺は紅茶の香りを楽しんでから、一口飲む。この時間は一日の中で一番楽しいと思う。

「今は、どんな本を読んでいるのですか？」

「んー？ 『三人の英雄』だね」

「ユーリ様はその本をよく読んでらっしゃいますよね」

「うん。ちょっと、どんな気持ちで魔物退治をしていたのか気になってね。ローラはどう

思う？」

本を見ながら、ローラにそう尋ねてみる。

「えっと、それは……やはり苦しんでいる人びとを救いたい、という思いなのでは？」

「まあ、なんとなく分からなくもないけど、俺が知りたいのはもっと根本的な動機のところ。なんでそういう気持ちにいたったんだろう。馬車であちこち回るだけでも面倒な

のに」

そう告げると、ローラの顔が明らかにドン引きな感じになっていた。

「な……なんと言いますか……ユーリ様らしい考え方ですね」

「けどさ、実際は面倒だし、そんなことする理由はローラにだって分からないよね？」

「まあ、私はただのメイドなので、そういう力を持った英雄の気持ちは分からないですね」

「むう……そうか」

確かに、そういう立場……人を救うようなことをしてみないと分からないのかもしれないなあ。

「あら？ ユーリ様、えっと……それは？」

ローラが不思議そうに俺の顔を見ている。

「ん？ なんだい？ ローラ」

「あの、首から下げていらっしやるペンダントの石が赤く光っているのですが……？」

首元のペンダントを掴んで見てみると、確かにボワツと光り輝いている。

これが光るってことは……。

「ローラ、ちょっと、用事ができたので、出かけてくる。夜には帰ってこられるはずだ

から」

「え、急にどうされたんですか!？」

「ちょっと、人助けに……このペンダントが光るのは俺の友達が困っている時なんだ」

そう言うと、ローラは一瞬キョトンとした表情を浮かべた後、笑顔になって口を開いた。

「ふふ、そうですか。行つてらっしゃいませ。夕ご飯には、帰ってきてくださいね」

俺はすぐさまジャケットをはおり、少しでも嬉しそうにローラに見送られて部屋から飛び出した。



私——冒険者のリナリーは今、どこかの納屋のような場所に閉じ込められている。

逃げ出そうにも、両手を鎖でつながれているので、どうにもできない。

ともに冒険者をしているルース、シル、そしてルシアも私とともに捕まっているため、助けを期待することもできない。

「はあ……みんな、すまない」

私がそう言うと、ルシアが応じる。

「いえ、リナリーのせいではないです……」

「私達も油断していたよ。それにしても、同じ冒険者が……くっ」

ルースは随分と悔しそつだ。まさか、こんな事態になるとは思わなかったからね。事の発端はダンジョンに向かう馬車の中でのことだった。

少年——ユーリと別れてから数年、鍛錬を重ねた私達はようやくダンジョンに挑める段階にきた。

そこで昨日、入念に準備を進めつつ他の冒険者を雇って、街を出たのだが……。

ダンジョンに向かう道中で、十数人からなる盗賊団に囲まれてしまったのだ。

今思えば……この程度の盗賊の襲撃などは軽くあしらえるという過信があったのかも
 しない。

馬車から飛び出し、身構えた私達を待ち受けていたのは……まさかの裏切り。

そう、街で雇った冒険者達が盗賊団の一員であり、不意を突かれてなすすもなく捕ら
 われてしまったという訳だ。

「う……う……私達これからどうなるのでしょうか」

シルがか細い声でそう言うけれど、私にも分からない。するとルースが口を開く。

「それは……奴隷の首輪でもはめられて……いや、この話、もうやめようぜ」

「うう……」

「死んだ方がマシですね」

ルースの言葉に悲惨な未来を想像したのか、ルシアは泣きそつだ。

シルも冷静な様子を崩してはいないが、声が震えている。

ん……？ 足音が聞こえてきたな。

「しっ、何か聞こえる。口を閉じろ」

私達が静まり返ると、納屋の外がなにやら騒がしくなってきた。

この声は……恐らく先ほどの盗賊団だろう。

酒盛りでもしているのか、大きな笑い声や、耳を塞ぎたくなるような下品な会話も聞
 こえる。

「このまま、何もせずにあいつらの好き放題にされるくらいなら……」

ルースが意を決して身を起こそうとするものの、鎖を引きちぎるまへには至らない。

「……」

自分が情けない。こういう時、仲間を励ます言葉の一つも見つけられない。

「……生まれ変わったら、また一緒に冒険者やろうぜ」

へたりこんだルースは、諦めてしまったのか、努めて明るい口調で私達に声をかける。

「ルース、貴女は……男の子に生まれてきそうだわ。そうだったら、見つけられる自信がない」

シルが俯きながら、ルースに憎まれ口を叩く。

「うわ、ひどい!」

その様子に、ルシアが少しだけ元気になったようだ。

「ひつく……そうですね。ルースさんは……ごめんなさい」

気丈に振る舞うみんなの姿を見て、涙が止まらない。

「すまない……。みんな、すまない」

ふと、ルースがさっぱりとした表情で口を開く。

「気にするなりナリー。シル、あんた最近、風魔法を練習していたよね？ 悪いんだ

が……私の首を落としてくれない?」

「……損な役回りですね。せっかく字んだ風魔法で頑丈な鎖を切り落とすならまだしも、

そんな使い方をする羽目になるとは思ってもみませんでしたよ」

シルの軽口に、思わずフツツと笑みがこぼれてしまった。

正直、私は死ぬことは怖くない。

冒険者は常に危険と隣合わせの仕事であり、そのことを理解した上で自分で選んだか

らだ。

キツイ仕事ではあったが、ここにいるみんなとともに任務を終わらせた時の達成感や、依頼者の喜ぶ顔はやはり格別の報酬だった。

なので、盗賊ごときに辱められ、奴隷に身を落とすくらいなら、ここで死ぬのも悪くない。

ただ一つだけ心残りがあるとすれば……。

「……少年との約束は守ることができなかったな」

「少年？ 誰ですか?」

ボソツと呟くと、ルシアが不思議そうに尋ねてきた。

先ほどまで泣いていたのに、なぜか楽しそうだ。

「……もう何年も前のことだが、グルルを倒した時にいた少年……ユーリ・ガートリンだよ」

「ああ！ そつういえば、いましたね。不思議な子供でした……すごい魔法を使ったかと思えば、普段は気急そうな貴族の……」

ルシアに続くように、ルースが思い出を語りだした。

「……ハイデンベルで宴をしたっけ？ 懐かしいなあ。オリーブ豚、めちゃくちゃ美味し

かったし、エールもたらふく飲んだし……あんなに楽しい飲み会、しばらくできなかったもんな。ていうか、リナリーはどんな約束をしたんだ？」

「それは……」

「気になりますね」

シルまで加わってきた。冷静な声色だが、なんだか楽しそつだ。

「ほら……私達が少年と別れてから、もう少して四年が経つだろう？ あ少年、あと二年したら王都の騎士学校に行くらしいから」

「ああ、王都でまた会おうみたいなの？ いいですね」

すっかり元気になったルシアがそう尋ねてきた。もはや悲壮感はない。

「そうだ。少年……ユーリとの約束を守れないのが……残念だ」

「は？ 俺の約束がなんだって？」

少年の声が聞こえた気がした。幻聴だなんて、私も大分疲れているのだな。

「いや、約束ってそもそもなんだっけ」

まだ聞こえるということは、誰かが声真似でもしているのだろうか。ルースかシルか？ こういう時に声真似するのは、少々悪趣味だと思うが……？

「おいおい、人の話を聞いているか？ まったく……わざわざ、こんなところまで助けに来

たっていうのに、ひどいなあ」

三度目の少年の声を聞いて幻聴や声真似でないことを確信し、顔を上げて納屋の中を探すと、少しだけ大きくなった少年の姿を見つける。

ルースやルシア、シルは信じられないという表情のまま固まっている。

私も恐らく、同じような表情をしているだろう。

そんな私達を見て、少年が笑みを浮かべてこちらに近づいてくる。

「なんで捕まってるの？ お前たちどんだけトラブルに巻き込まれやすいんだよ」

少年は、しゃがみ込んで私の頬ほほについていた埃ほこを軽く払う。

「ちよっ!? なんてここに!？」

思わず声を張りあげてしまった私を見て笑いながら、少年が鎖を壊していく。

「このくらいの鎖なら、魔法でも使って壊せるようにならないと」

少年がそう言うと、ルシアが反論する。

「な……そんな魔法を使える人はなかなかいません」

「え？ そうなんだ。じゃあ、俺が使えることは言っちゃダメだからね」

ユーリはちよつと困ったように頭を掻かきながら立ち上がった。

「そんなことより、なんで坊主は……ここにいるんだよ」

ルースが不思議そうに少年に尋ねる。

「んー……ちよつとこの辺りを散歩しててな」

「はあ……？ 坊主の屋敷からは随分と遠いけど？ まあ、いいか。助かったぜ、ありがと」

「じゃあ、どうやって私達を見つけてくださったのですか？」

シルも気になっていたのか、積極的に質問をしている。こんなシル、初めて見たな。

「そうだね……。とりあえず、リナリーにあげたお守り、それに感謝してくれたらとでも言っておくよ」

「は、はあ……？」

「ハハ、まあ信じる者は救われるって感じ？ 今日のことは何年か前と同じで、誰にも言わないようにね！」

少年がニカツと笑ってそう言つと、シルがボソツと咬くはいた。

「はあ、またこのパターンですか……」

「ハハ、そうだね。じゃあ、さっさとここから出よう。あ、外にいる盗賊団はもう片付けおいたから、そのへんにある鎖につないでおいて、明日にでもギルドに連絡して引き渡せばいいんじゃない？」

呆気にとられている私達に、少年はさらに続ける。

「ほら、早く早く。晩御飯までには帰らないと、うちのメイド達が心配しちゃうからね」

◆ 「たっだいま」

「どうしたのですか？ そんなに服を汚まして……」

そうローラに言われて自分の服を見てみると、確かにかなり汚まれていた。

「ちよつと、色々あってね。友達と遊んでいたら、汚れちゃったよ」

「ふふ、ユーリ様の子どもっほいとこも可愛いですね」

「今の言葉って喜んでいいのかな？ 俺、まだ子どもなんだけど」

◆ 十一歳になった、ある日のこと。

「あぁ……どうしよう。どうしよう。どうしよう」